

古代から中世における 矢作川下流域の河道変遷

鈴木正貴

矢作川下流域（現西尾市域）での古代から中世における河川の様相を解明するため、明治24年作成地形図から河道痕跡を抽出し、遺跡や遺物の分布などからその変遷を考察した。その結果、古代においては岡崎市正名町から西尾市野々宮町・市子町に至る大流路が1条存在し、周辺に複数の小河川が展開したと想定した。中世になると、陸地化が進みさらに多くの小河川が流れるとともに西尾市小島町から西尾市一色町赤羽に至る大流路（旧弓取川）が1条追加されたと推定される。14世紀末に六名堤が築堤された影響で後者の大流路が主流となっていくが、16世紀初頭においても細池の渡と鎌谷の渡が併存していることから、2条の大流路が存在したと復元できる。

1. はじめに

本稿では矢作川下流域の流路の変遷を考察する。

矢作川は岐阜県恵那市上矢作町から始まる一級河川である。上村川を遡り木曽山脈の大川入山（標高1908m）を水源とする（飯田洞川を遡り木曽山脈南部の阿岳に源を発する説もある）。拳母盆地から南は緩い勾配の西三河平野を貫流し三河湾に注ぐ。幹線流路延長は137kmにおよび、全流域面積は1830km²を占める（図1）。現在は碧海台地を横断し衣浦湾側に河口を持つ新川が開削されたが、それ以前は碧海台地東端の八面山丘陵群と幡豆山地の間を抜けて三河湾に注いでいたと考えられる。

『西尾市史』では矢作川をはじめとする河川の変遷について、以下のようにまとめている（赤堀1973）。矢作川下流部にあたる西尾市域では、碧海台地（洪積台地）と幡豆山地に挟まれた区域が古くは海であったと思われ、海進と海退を繰り返して現在の沖積低地が形成されたと考えられる。低地部を幾筋にも分かれ網状河川を形成したと思われ、広田川や鹿乗川などを含めて乱流していたと想定した。15、16世紀には流路が次第に固定化され、『三和村誌』では西浅井町と小島町との村境、西浅井町二ヶ崎の山間から小島町を回り江原町と岡島町の東に出て今川町の弓取を経て川口町より赤羽に至るとされた。

矢作川の大きな画期は、慶長年間に実施された新川の開削であろう。『徳川実紀』には慶長10年（1605）7月23日の記事に「三河国碧海郡米津村の地をうがち、矢作川の下流を通じせしめらる」とあり、『寛政10年（1798）上町差出帳』などによれば、長さ12町（約1300m）、幅20間（約36m）の規模で、碧海郡藤井村から米津村まで掘り抜き鷺塚村へ掘り明けたという。

新川開削後の矢作古川的位置については、上

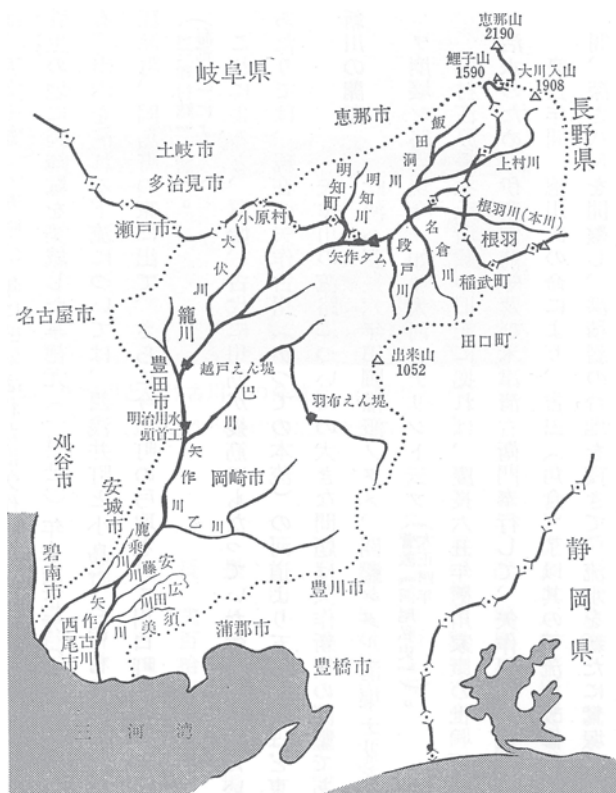


図1 矢作川流域概要図（赤堀1973から）

流部は二ヶ崎川と竜宮川が想定され、その変遷には諸説がある。下流部は弓取川で小焼野から南西方向に流れ東岸にて細池、斎藤、市子、八ヶ尻、赤羽根の各集落に至る（図2）。この弓取川は『福地村各大字古代事項取調記録』から正保3年（1646）に閉塞され川違えが実施されたと考えられている。

この記録には、「三州幡豆郡横須賀村惣百姓申し上げ候 私共村を流れ候 横須賀川と申し候 往古は同国野場村菱池より流れ出 その流れを鴻田（広田 か）川と申し 其の末横須賀川

と申し 末は大島村より海へ流れ落ち申し候 尤も其の節は堀底四間の纔成流れにて私共村方の用水川にて御座候処 正保三戌年西尾の御城主井伊兵部少輔（直之）様御在城の節 岡田茂右衛門殿御奉行にて矢作川の流れ井水取（弓取か）と申す川を新田に御開発罷り成り これに依り高河原小焼野村の芝野を押し破り大川の水鴻田川へ落ち合い 横須賀川大川に罷り成り 其の節より水出の時分並に冬季には徒渡り相叶わず候」とあり（かつこ内は鈴木が補註）、高河原と小焼野の間の芝野を切開し弓取川を広田



図2 矢作古川の旧河道（赤堀 1973 から）右上が二ヶ崎川、左下が弓取川

川（横須賀川）に流したことにより福地村で多くの新田が開発されたのである。

上記のように、慶長10年（1605）頃の矢作新川の開削と正保3年（1646）頃の弓取川の閉塞による川違いによって、現在流れる矢作川と矢作古川の流路は概ね固定したものとみられる。

一方、現在も西尾市周辺を流れる河川がいくつかある。広田川は幸田町の菱池を水源とする矢作古川水系の最大支流である。かつて菱池は四方の山地から流下する小河川が集中して大池を形成したが、現在は耕地化された。安藤川は岡崎市天白町付近を水源とし悪水を集めて現在は高河原町付近で矢作古川に合流している。かつては江原町付近で合流したが増水時に逆流するなど水難が多かったという。須美川は幸田町須美山を水源とし現在は花蔵寺町付近で広田川に合流する。この川は流路が短く荒れ川であったが、室場地区の重要な灌漑水路でもあった。

このように現在は築堤工事が進み河川は固定化され水害も減少したが、かつてはたびたび水害を起こしていた。特に、江戸時代前期に行われた矢作新川の開削と弓取川の閉塞以前の矢作川の状況は、現在となっては不明な部分が多い。本稿では矢作新川の開削以前の矢作川下流域の流路について検討することとしたい。

2. 研究史（人文地理学的検討）

さて、当該地域の沖積低地の形成過程についての研究はそれほど多くない。それでも人文地理学的な研究と自然地理学的な検討が行われており、それぞれに大きな成果が得られている。まず、人文地理学的な研究としては、縄文時代から江戸時代までの地形変遷をはじめて概観した大橋正明の論考がある（大橋 1983）。大橋は遺跡と遺物の分布から時期別に汀線と矢作川流路を推定した。大橋が採集した遺物の詳細が提示されていないため、分析結果の検証が難しくなっている面は否めないが、具体的な変遷案を提示した意義は大きい。

大橋はまず各時期の汀線を検討した。1）縄文時代については貝塚の分布から、縄文時代前期の汀線は釜田貝塚付近（現海岸から 10.5km

の位置）で海面の標高は 7m を越えないものとし、縄文時代後期の汀線は八ツ面山南麓よりもやや南で海面の標高は 5m 程度と推定した。また、縄文時代後期末～晩期初頭に小規模な海進があったことも指摘した。2）弥生時代では、旧吉良町北部で沖積低地が形成され現在の標高 2m 付近に汀線があったと考え、現矢作古川右岸では八ツ面山付近まで海が湾入していたと推定した。3）古墳時代では今川や野添などで遺物が採取され、これを結ぶラインを汀線と想定した。4）奈良・平安時代の汀線は、菱池から平口、小山田を結ぶ線と思われる。5）鎌倉・南北朝時代では、遺物の分布に加え饗庭荘・饗庭御厨の記述などから、行用から中野田の南を通り松木島のラインに汀線があったと推定した（図 3）。

次に、大橋は河道の変遷に言及している。1）矢作新川開削直前は、『西尾市史』の記述から西浅井町と小島町の間を旧二ヶ崎川が抜けて現安藤川を下り弓取川に至る流れを矢作川とした。またこれと別に広田川が存在した。2）現矢作古川河口部に河道跡を見出し、その中でも笹曾根から前野に続く河道跡は汀線と遺物の分布から中世前半の広田川につながると想定し旧対米川と命名した。また旧二ヶ崎川は、その河道跡に所在する北裏遺跡の出土遺物からみて 14 世紀末以降に矢作川本流の一部になったと類推した。3）応永 6 年（1399）「管領畠山基国奉書案」（佐々木文書『愛知県史』資料編 8-757）によれば、六名堤を築くことにより下和田郷に用水が通らなくなった旨が記されており、下和田を通る占部用水（占部川）とそれに伴う大規模な自然堤防が六名堤築堤以前の矢作川本流であると推定した。六名堤築堤が占部用水から旧二ヶ崎川に矢作川本流が変化した契機と理解したのである。4）中世前半に河口付近に存在が想定された旧弓取川と旧対米川は旧広田川が分流したものと考え、旧二ヶ崎川は一支流に過ぎないと推定した。5）律令時代（奈良・平安時代）ではすでに旧占部川が矢作川本流となっており、遺物の出土分布から現広田川よりも北寄りに流れたと想定し、河口は旧弓取川的位置に当てた。

大橋の論考は傾聴に値する重要な考察である

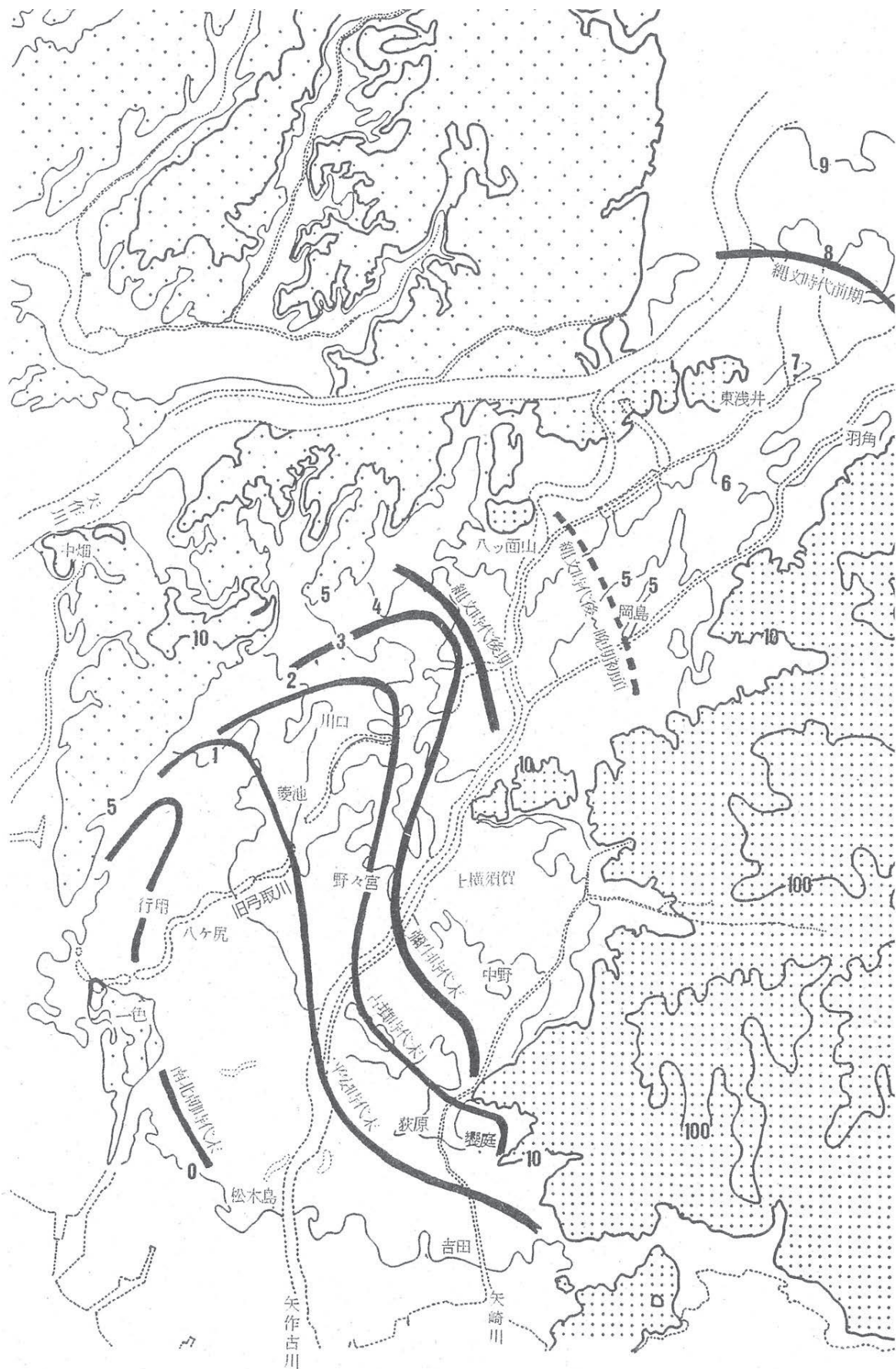


図3 各時代の汀線の変遷（大橋 1983 から）

が、中世以前の築堤技術が未熟な段階の沖積低地の河川は網状河川となるのが一般的であり、大きな流れのみを想定している点に若干の問題があるように感じられる。現況の微地形から読み取ることができる流路とそれに伴う自然堤防の把握を詳細に行う必要があるだろう。

この他の人文地理学的な考察に、佐藤孝二が矢作新川開削から弓取川閉塞に関する経緯をまとめたもの（佐藤 2008）があるが、本稿の主題からはやや外れるため、ここでは割愛する。

3. 研究史（自然地理学的検討）

一方、自然地理学的な研究も存在しており、矢作川については川瀬久美子の論考を避けて通ることはできない。まず、日本の臨海沖積低地の発達については三角州の前進によると捉えられ、沖積層は中部泥層（底置層）、上部砂層（前置層）、最上部陸成層（頂置層）に区分されている。地学的な研究は基底から上部砂層を中心に進められたが、現在は沖積低地の陸化以降の地形環境の変遷について研究が進められるようになってきた。井関孝太郎は中部地方の発掘調査成果などから完新世後半の海水準変動に対応し形成された埋積浅谷、弥生時代を中心に腐食土層が発達した静穏な堆積環境、9～11世紀に自然堤防が形成されたことなどを推測した（井関 1974, 1979）。これを踏まえ、矢作川下流低地における地理学的な考察を実施したのが川瀬久美子である（川瀬 1996, 1998）。

川瀬は既存ボーリング資料とハンドオーガーによる掘削調査結果から、低地狭窄部 KNG-4 地点（上永良町）周辺で標高 0m 前後に面的に連続した砂層上面を確認した。珪藻分析から標高 - 0.3m で海水の影響を受ける環境下で砂層が堆積し、標高 + 0.2m で淡水性種が優占していたことから、その砂層を上部砂層と推定した。この上部砂層直上で $2920 \pm 230\text{yrBP}$ の年代値が得られ、岡島遺跡の調査成果（森・伊藤 1990、森・前田 1993）も合わせて考えると低地狭窄部では約 3000 年前に陸地化されたと結論付けた。その後岡山の南部で約 1800～1000 年前頃に陸地化が進行したと考え、矢作川右岸では約 2000 年前頃から低地の縁辺から

陸地化が始まり、十郎島町付近などが完全に陸地化したのは約 1000 年前前後と推測した。この結果、当時の矢作川本流が幡豆山塊寄りに河道を持ち、土砂の堆積の中心が低地東部にあった可能性が指摘された（川瀬 1996）。

さらに川瀬はいくつかの情報を集め、最終的に矢作川下流低地の古地理を 6 段階に分けて整理した（図 4）。

1) 約 6000 年前：海岸線は現在の東海道新幹線付近にあり、低地の大部分は海域であった。

2) 約 4500 年前：山地で貝塚が形成されなくなることから、汀線が海側に移動した可能性がある。

3) 約 3500 年前：釜田遺跡が沖積低地上に立地することから低地北部の上流付近は離水していたと考えられるが、永良以南はまだ内湾の状態であった。

4) 約 2500 年前：低地北部および北西部の広い範囲で急速に三角州が離水した。後背湿地的な環境のもと厚い腐植土層が形成された。

5) 約 1500 年前：低地東部で汽水湖沼・塩性湿地が淡水化しつつあり、三角州が離水した地域で後背湿地に腐植土層が形成。三角州の離水が完了した低地北部および北西部では流水の影響が強くなり、洪水氾濫の影響により腐植土層の形成が行われなくなる。

6) 約 1000 年前：低地東部の荻原付近まで三角州が離水し低地南西部でも三角州の離水が進行した。腐植土層が形成された範囲はわずかで、中世まで台地に沿って海が湾入していた。

この結果、矢作川下流低地では約 3000～2500 年前に海水準低下（弥生の小海退）に伴い三角州の離水が進行した。陸化後は安定した後背湿地的環境を維持したが、約 2000 年前（河川氾濫期Ⅰ）と 1400～1200 年前（河川氾濫期Ⅱ）に河川の氾濫が活発化し粗粒堆積物の堆積が顕著になった。こうした堆積環境の変化は気候変動と森林破壊が影響した可能性が指摘された（川瀬 1998）。

その後、鬼頭は岡山丘陵帯南側の沖積低地の微地形と層序の解析を行い、約 4000～5000 年前に低平化が進み、岡山南遺跡の調査区の東側で約 1600 年前、西側で約 1200 年前に離水

環境が出現したことを指摘した(鬼頭 2019)が、下流域全体を論ずる論考はみられない。

4. 古河川の推定方法

さて、以上の研究成果を踏まえ、ここでは改めて河道の変遷を詳細に検討する。汀線については大橋および川瀬の分析結果を用いるが、両者は微妙に異なるため若干の改変を行っている。河道については、大橋が河口部で実施したように河道痕跡を抽出し、その平面的な重複関係や遺跡と遺物の分布状況などから抽出した河道の新旧関係を明らかにする。河道痕跡を抽出する方法については、これまで筆者らは愛知県公文書館所蔵地籍字分全図(地籍図)を用いて検討を進めてきた(小澤ほか 2004 など)。た

だし、今回検討する区域についても地籍図が存在するものの、その整理が未だにできていないため、ここでは大日本帝国陸地測量部作成の明治 24 年所定 20000 分の 1 地形図(櫻井村、福岡村、西尾、深溝村)を活用することとした。

この地形図には凡例が存在せず、かつ地図記号が現在とは微妙に異なっているため、まずあらかじめ沖積低地部にある地図記号について整理しておく。本図中に最も多くみられる「@」⁽¹⁾は水田と思われる。明治 40 年代までの地形図では田は乾田と水田と沼田に表示が区分されており、表記に曖昧な部分も認められるが「@」⁽¹⁾はほぼ水田として理解できよう。枠線内を斜線と灰色で充填された小型の矩形表記は建物と理解できるが、この建物をさらに囲うように荒い斜線で充填された枠線表記は、明治 40 年代

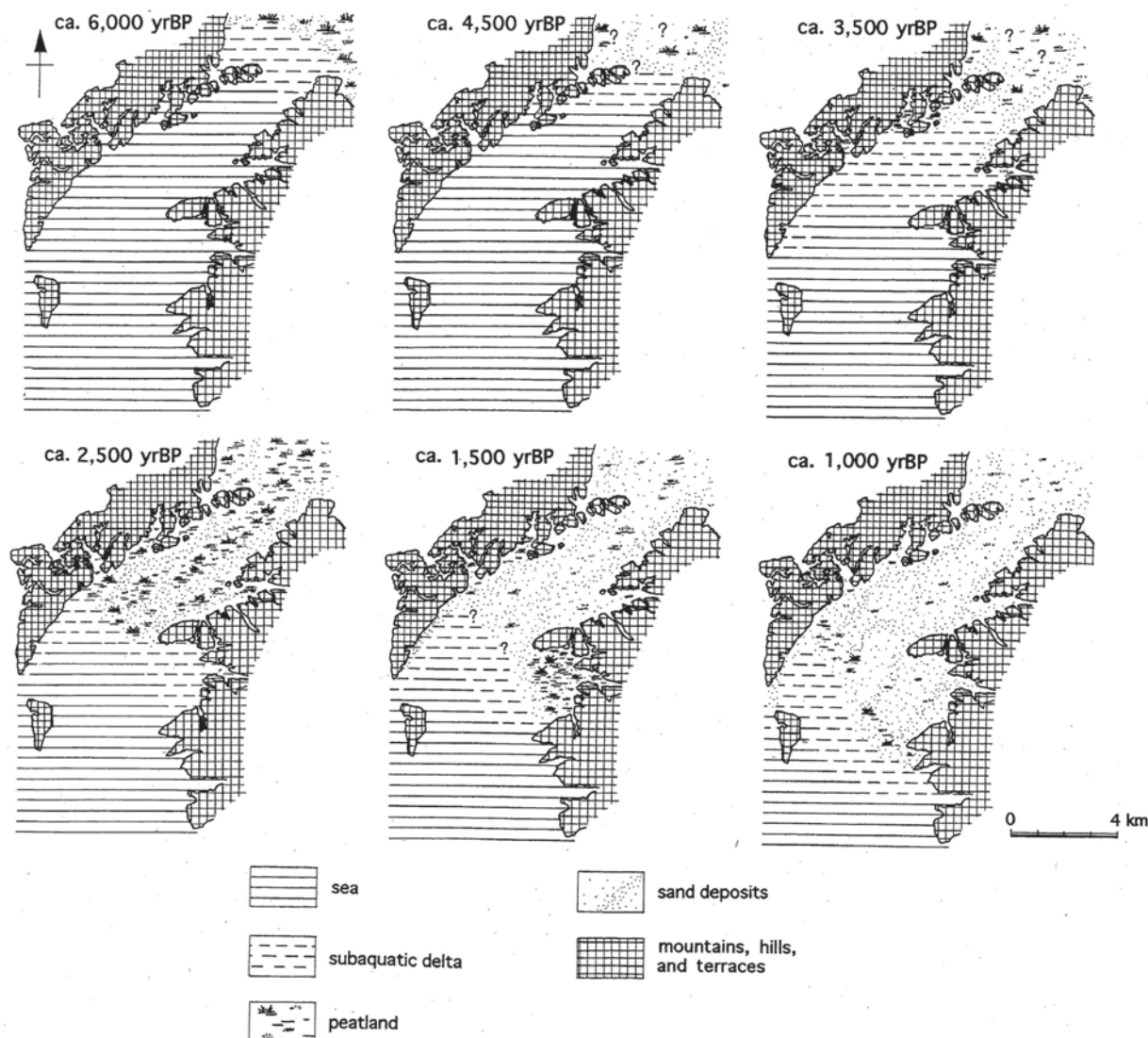


図4 矢作川下流低地における古地理の変遷(川瀬 1998 から)

(1) @ は  を表す

までの地形図では一般に樹木などに囲まれた居住地を示すが、ここでは集落域を示していると考えられる。二重実線、二重破線または実線と破線の組み合わせは道路、波線は水路、一点鎖線は村境であろう。また、ケバ表記は傾斜地を示すが、これが一重に並ぶものは堤・土手状地形と考えられ、その枠内を横線で充填された曲線表記は沼沢地またはため池と思われる。問題は水田域および集落域の境界線である細い破線で区切られた区域のうち何も表記されていない部分であり、状況からみて何も活用されていない荒蕪地と考えられ、多くは河道跡の沼沢地ではないかと想像される。

以上の解釈をした上で、明治24年所定20000分の1地形図から沖積低地域域の河道痕跡を抽出する方法として、まず集落域はほぼ微高地であることから河川により形成された自然堤防の一部と想定する。集落域は大部分が島状に点在するものの列状に並ぶ傾向が認められ、集落域が二列に並ぶその間が河道跡の可能性が考えられる。そしてこうした部分のうち、河川、波線表記された水路、および空白表記された荒蕪地のうち細長く伸びる部分を河道そのものと推定する。このようにして抽出された比較的長く推定できる河道跡は全部で26条が抽出できた(図5)。なお、これらは現在も河川や用排水路となっているものが大半である。

5. 推定された古河川

河道A：現在の北浜川に対応する河道。熊味町山畔付近を源流としてそこから寄住を經由し碧海台地東辺に並走して中根と大戸の間の低地を河口部とする河道。長縄の西側で河道K、国森の東側で河道J、西尾の東側で河道Lとそれぞれ合流する。この下流部は先行研究では古代末では海が湾入していた部分に相当し、江戸時代に陸化したものとみられる。

河道B：旧弓取川(現古川用水西部幹線)に対応する河道。現矢作古川の小焼野の北側から発し、左岸に細池・須脇・斎藤・市子・八ヶ尻・赤羽、右岸に今川・川口・菱池・熱池・道目記・行用・開正の集落が所在する自然堤防が形成される。中世末期まで矢作川本流とみられる流路

で正保3年(1646)頃に閉塞され、江戸時代には河川敷は新田開発された。

河道C：現在の一色排水路に相当する河道。宅野島の西側を源とし、左岸に鵜ヶ池・鎌谷・天竹・野々宮・前野駒野・前野、右岸に細池・十郎島・市子・一色の集落が所在する自然堤防が形成される。

河道D：現矢作古川の天竹の東側から発し、左岸に横手・平口・笹曾根、右岸に天竹・野々宮の集落が所在する自然堤防が形成される河道。その先は明確ではないが、河道Eにつながる可能性がある。

河道E：現矢作古川の笹曾根の南側から発し、左岸に大塚、右岸に笹曾根・池田の集落を經由して、対米内を西南西の方向に流れる河道。大橋正明が仮称した「旧対米川」に相当する。

河道F：現矢作古川。矢作川から志貴野東側で分流し、川田・小嶋岡山・和気などを經由し現在は高島新田と千生新田の間の低地を河口部とする河道である。和気の北側までの部分は慶長10年(1605)頃の矢作新川の開削以降に開削されたものと考えられる。和気以南についても、河道Fの方位は河道B、C、D、E、M、N、Qなどの流路の方位と異なることから、現在ある流路が正保3年(1646)頃の弓取川の閉塞に伴う瀬替え以降に確定し、中世では主要な流路ではなかったものと思われる。ただし、中世以前は河川が網状となっていたと思われるので、部分的には以前から主要河道をつなぐ分流として流れていた可能性は想定される。

河道G：左岸に青木・富田・外野、右岸に下横須賀・荒子・八幡川田の集落が所在する自然堤防が形成される河道。木田と上横須賀付近から発するものと思われる。現在の朝鮮川に近似するが、位置は合致しない。

河道H：左岸に梶洗・中野・酒井・荻原細畑、右岸に小牧・青木・雑役免の集落が所在する自然堤防が形成される河道で、前後は河道Iにつながっていた可能性がある。

河道I：現在の矢崎川に相当する河道。宮迫の東側を源流とし左岸に文道・津平・友国・小薄・饗庭、右岸に丸山・駿馬・梶洗・中野・酒井・荻原の集落を經由する河道で、駿馬付近で

現在の炭焼川が合流する。

河道 J：現在の二の沢川に相当する河道。西尾の西側付近から発し、右岸に住崎・新在家の集落を経由して河道 A に至る河道である。下町（実相寺）付近から発し西尾と鶴城山下の間で合流する河道が存在した可能性もある。

河道 K：現在の北浜川東部雨水幹線排水路に相当する河道。現矢作古川の徳次の北東側から

発し、左岸に徳次・柳堂・寄近・今川・川口・菱池、右岸に熊味・丁田・今川元河原・矢曾根・深池の集落が所在する自然堤防が形成される河道で、その先は河道 A につながる。深池と矢曾根の間にも河道跡を見出すこともできるが、これは河道 K よりも古い可能性がある。

河道 L：現在の道光寺川に相当する河道。志簗谷の北側から発し、左岸に中原・八ッ面・山

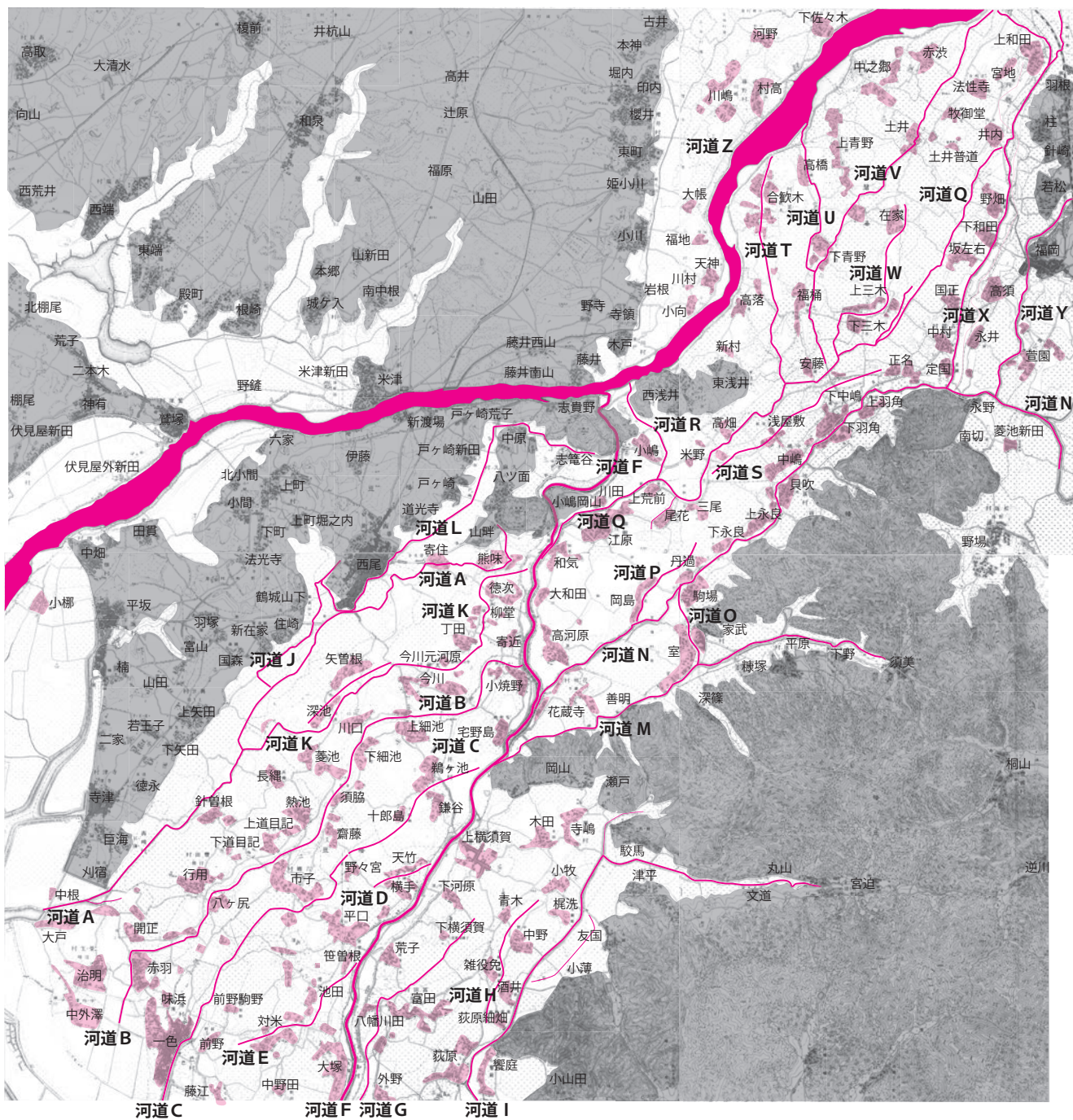


図5 矢作川下流域における古河道 (S=1:80,000 明治24年作成地形図から作成)

畔・寄住、右岸に戸ヶ崎・道光寺の碧海台地上の集落が展開しており、河道 A につながる。

河道 M：現在の須美川に相当する河道。須美から発して幡豆山地西側の裾部を流れ、宅野島付近で河道 F に合流するが、古い段階は河道 D につながっていた可能性がある。

河道 N：現在の広田川に相当する河道。幸田町菱池を源流とし、左岸に上羽角・下羽角・貝吹・駒場・花蔵寺、右岸に正名・中嶋・上永良・下永良・高河原が所在する自然堤防が形成されたと思われる。花蔵寺付近で河道 F に合流するが、古い段階は河道 C につながっていた可能性がある。

河道 O：河道 N の駒場付近から分流し、河道 M の室付近で合流する短い河道。左岸に駒場・家武、右岸に室の集落が展開する。

河道 P：現在の永池川に相当する河道。下永良の西側付近から発し、左岸に丹過、右岸に岡島の集落が存在する河道で、その先は河道 N につながる。

河道 Q：現在の安藤川に相当する河道。岡崎市井内町付近から発して安藤を経由し、左岸に浅屋敷・三屋・尾花・江原、右岸に高畑・米野・川田が所在する自然堤防が形成されたと思われる。安藤付近で河道 W、河道 V、河道 T が合流しているが、その上流部は自然堤防が発達していないので大きな流路となっていなかった可能性もある。江原上荒前付近で河道 R が合流し、さらに河道 F に至るが、古い段階は河道 K につながっていた可能性がある。

河道 R：旧二ヶ崎川に対応する河道。現矢作川の西浅井の北西側から発し、小嶋を経由して江原上荒前付近で河道 Q と合流する。慶長 10 年（1605）頃の矢作新川の開削前の矢作川的主要流路とも思われ、矢作古川が現在の河道 F になって以降は閉塞されている。

河道 S：正名・浅屋敷・米野に細長く伸びる空白表記された荒蕪地があり、これを河道跡と想定する。河道 N または河道 Q の古い流路跡になるかもしれない。

河道 T：現在の合飲木川に相当する河道。現矢作川の岡崎市合飲木町付近から発して高落を経由し、東浅井の東側で河道 Q に合流する。

河道 U：現在の青野川に相当する河道。現矢

作川の岡崎市高橋町付近から発して下青野を経由し、その南側で河道 V に合流する。

河道 V：現在の赤渋川に相当する河道。現矢作川の岡崎市赤渋町付近から発し、左岸に法性寺・牧御堂・土井普道・在家、右岸に赤渋・土井・下青野・福桶・安藤の集落が所在する自然堤防が形成されたと思われる。下青野で河道 U と合流し安藤の南側で河道 Q につながる。

河道 W：現在の在家川に相当する河道。岡崎市在家町付近から発し、左岸に下三木、右岸に上三木の集落が所在する自然堤防を形成した。安藤の東側で河道 Q につながる。

河道 X：現在の占部川に相当する河道。岡崎市羽根町の西側付近から発し、左岸は丘陵脇を流れ高須・永井、右岸に上和田・宮地・井内・野畑・下和田・坂左右・国正・中村・定国の集落が展開する自然堤防を形成して、河道 N（広田川）につながる。応永 6 年（1399）「管領畠山基国奉書案」（佐々木文書『愛知県史』資料編 8-757）によれば六名堤を築くことにより下和田郷に用水が通らなくなった旨が記されており、14 世紀末までは河道 X が矢作川的主要流路だったとみられる。

河道 Y：現在の砂川に相当する河道。岡崎市若松町付近から発し福岡を経由して、萱園の集落が所在する自然堤防が形成されたと思われる。永野の北側で河道 N（広田川）につながる。

河道 Z：現矢作川中流部に相当する。左岸に高落・新村、右岸に天神・小向が所在する自然堤防が形成され、その後は河道 R と河道 F に分流する。慶長 10 年（1605）頃の矢作新川の開削に伴い、藤井・新渡場・米津を経由し油ヶ淵に流れる形となった。

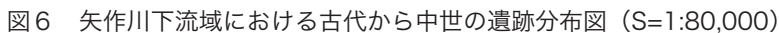
6. 古河川の変遷

次に、上述のように抽出した河道 26 条の時期を考察する。分析の方法は、大橋が用いたように遺跡（遺物）の分布から考えてみる。ここで用いるデータは 2018 年に西尾市教育委員会が刊行した『西尾市遺跡分布調査報告書』の成果である。同委員会は 2011 年に西尾市・吉良町・一色町・幡豆町が合併したのを契機に合併した市域全体の詳細遺跡分布調査を実施し、報

6(1). 古代の河川

まず、図6から古代の遺跡の分布結果についてまとめると、古代の遺跡は1)市域西部にある碧海台地縁辺部、2)旧吉良町北部の岡山周辺、3)河道Hにより形成された自然堤防上、4)河道Iにより形成された自然堤防上および

この結果、沖積低地部分では河道 C・河道 G・河道 H・河道 I、河道 N はその自然堤防上に遺跡が所在する程度の流路が存在していたことが推定される。また、碧海台地縁辺部に遺跡が所在する河道 L・河道 M も存在していたと推定され、遺跡・遺物が分布しないが河道 R も流れていたと思われる。この中で矢作川上流から流れた本流に相当する流路は、古代の遺跡が多くかつ比較的によく自然堤防が発達した河道 N を中心に展開したと思われる。大橋が下和田を



6(2). 中世の河川

台地・山地 自然堤防 沖積低地 河川・河川跡

図7 矢作川下流域における古代末の古河道 (S=1:80,000)

道Qにより形成された自然堤防上に中世の遺跡が所在することがわかる。この結果、沖積低地部分では河道C・河道G・河道H・河道I、河道L・河道M・河道N・河道Rに加え、河道A・河道B・河道D・河道E・河道K・河道Qもその自然堤防上に遺跡が所在する程度の流路が存在していたことが推定される。

この中で矢作川上流から流れた本流を考えるにあたり、それに関する史料が存在する。冷泉

為広が永正10年(1513)に京都から駿河への旅の記録である『為広駿州下向日記』(新編西尾市史資料編2-687)には、吉良荘西条の実相寺真如院から東条の東幡豆長栄寺に向かう記述がある。そこには、「此辺ノ■渡ニホソ池ノ渡、カマヤノ渡トテニアリ、小舟引綱ノ縄ノホソ河ヤカマヤトヲカケテワタリスラシモ」と記され、西側碧海台地上にある実相寺真如院から東幡豆長栄寺に向かう間に細池と鎌谷の2つ



図8 矢作川下流域における中世末の古河道 (S=1:80,000)

の渡（大きな河川）が存在したことがわかる。細池の渡は上細池または下細池に所在する河道Bに伴う渡であり、鎌谷の渡は鎌谷に所在する河道Cに伴う渡であると考えられる。この結果、河道Cと河道Bが中世の大きな河川であった可能性が高く、古代から存在する河道Xから河道Nを経て河道Cに至る流路と、河道Zから河道Rと河道Fを経由して河道Bに至る流れがあったと推定できる。大橋は六名堤の築堤に伴い矢作川本流が河道X（占部川）から河道Z（現矢作川）に変化したと指摘していることから、水流の主体は前者から後者に推移したと思われる。汀線は大橋と川瀬の検討で明らかのように沖積低地西側でも赤羽付近まで陸地化したものとみられる（図8）。

最後に、古代および中世の矢作川下流域の河川の様相を把握した上で、かつて愛知県埋蔵文

化財センターで発掘調査した室遺跡の古代の導水路について、その構築意図について再検討したい。

7. 室遺跡の古代の導水路の再評価

室遺跡は西尾市室町と駒場町に所在する古代から中世にかけての遺跡で（図9）、奈良・平安時代では河道3条、杭列群3ヶ所、大型木樋3基、土坑などが検出された。これらの遺構は灌漑施設に伴うものと考えられ、報告書では4段階に整理されている（都築1994、鈴木2019）。

I－I期（8世紀末～9世紀初頭）では、北東部を南東方向に流れる自然流路NR 03から土手状遺構の南西側に導水するために溝SD 01と木樋Cが構築された。溝SD 01から流れ

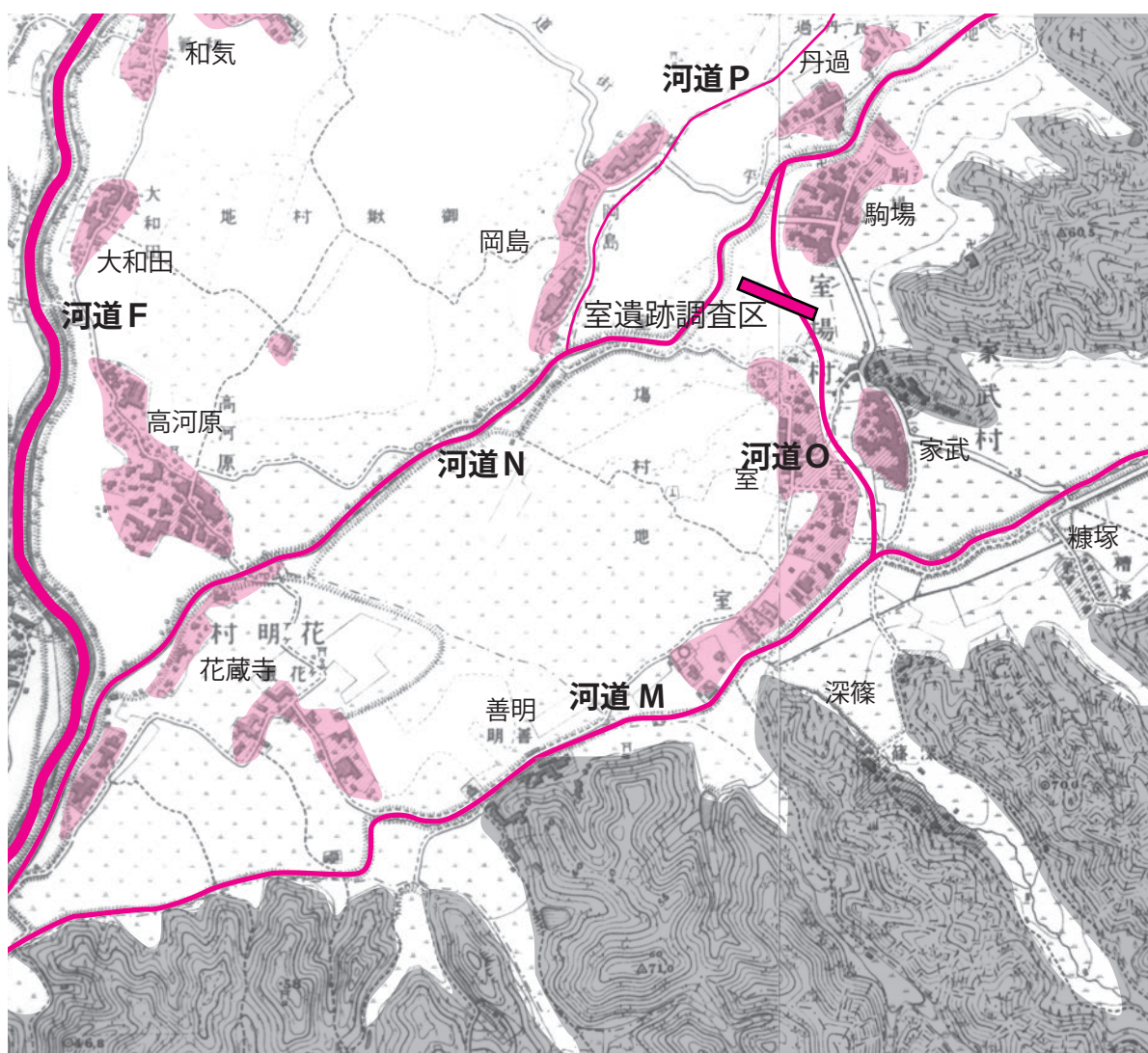


図9 室遺跡の発掘調査位置図（S=1/20,000 明治24年作成地形図「深溝村」を改変）

る水をいったん土坑 S K 02 に貯水させて流水速度を緩めて沈砂させた後に、土手状遺構で水位を高めて貯水土坑からオーバーフローさせ、逆サイフォンの原理を使って大型木樋を通して高所（比高約 60cm）に揚水したものと考えられる（図 10）。木樋本体の放射性炭年代測定で $y.AD807 \pm 43$ 、木樋蓋の年輪年代測定で $742 + \alpha$ という数値が出されており、8 世紀中頃に製作・設置されたものと推定される。

I－2 期（9 世紀末～10 世紀後半）では、I－1 期と同様に N R 03 から土手状遺構の南西側に導水するために溝 S D 01 と木樋 B が構築された。木樋 B は木樋本体の放射性炭年代測定で $y.AD873 \pm 273$ 、年輪年代測定で $715 + \alpha$ という数値が出されているが、共伴遺物の年代から 8 世紀末～9 世紀前半に製作・設置されたものと推定される。廃絶された時期は土坑 S K 01 出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

I－3 期（11 世紀前半～11 世紀末）でも、I－1 期と同様に N R 03 から南西側に導水するために溝 S D 02 と木樋 A が構築された。木樋 A は木樋直下から出土した遺物の年代から

11 世紀前半に製作・設置されたものと推定される。廃絶された時期は不明である。

I－4 期（11 世紀末～12 世紀初頭）では溝 S D 02 のみで導水されたと思われる。

このように、8 世紀中頃に木樋 C が設置されて以降、形状を変化させながら 12 世紀初頭までの間、北東部を南東方向に流れる自然流路 N R 03 から南西に向けて水路を構築し続けたことが判明した。N R 03 は先の矢作川下流域の流路の推定では河道 O に相当すると思われる。そして、水路から水を流す南西側には室城跡の所在する小丘陵の西側を通過して河道 M と河道 N に挟まれた沖積低地が広がっている。この低地は河道 M と河道 N により形成された自然堤防の裏側の後背湿地であったと思われることから、この水路を設定した意図はこの低地を水田耕作地として開発するための導水路であったと想定することが可能であろう（図 11）。河道 N の西側は古代においてはまだ陸地化が進んでおらず開発に適していなかったものとみられ、河道 M と河道 N に挟まれた区域が河道 N の自然堤防上に成立した古代集落に伴う主要な生産

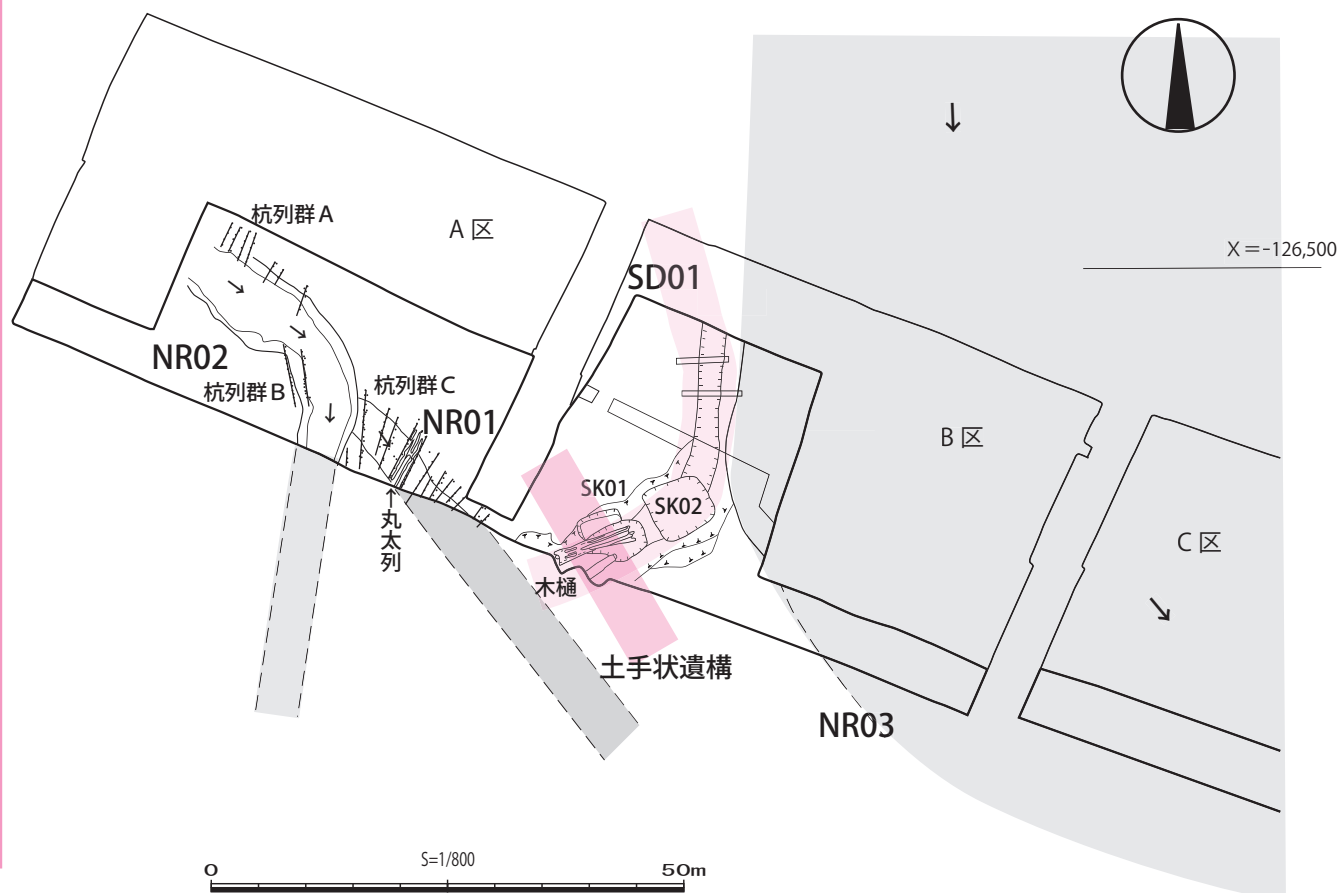


図 10 室遺跡古代導水施設概要図 (S=1/800 鈴木 2019 を改変)

域として開発が進んだものとみられる。河道Oは河道Nから分流した河川で、報告書（都築1994）ではNR 03は川幅100m以上と推定し、弥生時代から平安時代の遺物が出土し長期にわたって存在したと報告しているが、実際にはそれほど規模はなく矢作川の支流であったと思われる。河道Mや河道Nから導水するよりも河道O（NR 03）の方が開発しやすかったのではないかと想像される。さらに、この結果を踏まえ、矢作川下流域の古代の地形を概観すると、岡山丘陵群の南側の河道G・河道H・河道Iの流域も室遺跡の南西側で想定された耕作地に近い地形を有することがわかる。矢作川下流域の古代は碧海台地縁辺部と沖積低地の東側で開発が進んでいたといえるだろう。

8. まとめ

以上の検討の結果、弥生時代以降に矢作川下流域で沖積低地の陸地化が徐々に進み、古代においては正名から野々宮・市子に至る大流路が1条存在し、周辺に複数の小河川が展開した。中世においてはさらに陸地化が進み河道も数は増加し、さらに小嶋から赤羽に至る大流路が1条追加されたとまとめられる。ただ、本稿は現状で捉えやすい流路のみを対象としており、細かい部分については曖昧な部分を多く残している。愛知県公文書館所蔵地籍字分全図（地籍図）を用いれば、もう少し詳細な流路の検討が可能であろう。今後の課題としたい。



図11 古代における室遺跡周辺の開発イメージ図 (S=1/20,000)

引用・参考文献

- 赤堀隆 1973 「第1 自然環境 2 地形 地質 (四) 矢作川水系」『西尾市史1 自然環境原始古代』西尾市
- 井関弘太郎 1974 「日本における 2,000 年 B.P. ころの海水準」『名古屋大学文学部研究論集 LX II』155-176
- 井関弘太郎 1979 「自然堤防の形成について」『名古屋大学文学部三〇周年記念論集』245-259
- 大橋正明 1983 「遺跡・遺物の分布から見た矢作川下流域沖積地形形成過程の研究」『歴史研究 27,28 合併号』愛知教育大学
- 小澤一弘ほか(中・近世研究部会) 2004 「尾張国富田荘の考古学的研究―成願寺を中心として―」『研究紀要第5号』愛知県埋蔵文化財センター
- 川瀬久美子 1996 「矢作川下流低地における縄文海進期以降の陸化の進行」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書巻7』名古屋大学年代測定資料研究センター 天然放射性元素測定小委員会
- 川瀬久美子 1998 「矢作川下流低地における完新世後半の地形環境の変遷」『地理学評論 71A-6』
- 鬼頭剛 2019 「西尾市中央部、岡山南遺跡における地形と層序の解析」『岡山南遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第212集
- 佐藤孝二 2008 『覚え書き：地籍図から見た矢作古川小史：治水と利水』
- 鈴木正貴 2019 「室遺跡」『『新編西尾市史資料編1 考古』西尾市
- 都築暢也 1994 「第II章調査の成果―遺構―第2節古代」『室遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第49集
- 西尾市 2020 『新編西尾市史資料編2 古代・中世』
- 西尾市教育委員会 2018 『西尾市遺跡分布調査報告書』
- 森勇一・伊藤隆彦 1990 「愛知県岡島遺跡における珪藻遺骸群」『岡島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集
- 森勇一・前田弘子 1993 「珪藻および昆虫化石群集から得られた岡島遺跡の古環境変遷」『岡島遺跡II・不馬入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第43集